緩和×救急の巻

　2022 年 11 月 30 日、当院のがん関連看護師が中心となって「緩和ケアオープンセミナー」を開催しました。私もその勉強会の冒頭でお話しさせていただきました。この時のテーマは「救急×緩和ケア」というものでした。救急も緩和もそれぞれ専門的な領域であり、普段は必ずしも密接に連携しているわけではありませんし、一見、水と油みたいなもの同士に見えるかもしれませんが、患者さんにとってはそのどちらも大切です。

　がんを患った患者さんにはその経過を通じて様々な場面があります。病気そのものや、抗がん剤などの治療によって引き起こされる緊急症「オンコロジックエマージェンシー」という状態では、いち早く診断と治療が開始されなければなりません。

　一方、ひと通りの治療を経験し、抗がん治療を見合わせた方がよい時期に差し掛かると、全体的な体調不良が慢性化します。その過程で起こる困りごとや不安は、救急車を呼ぶことでは解決できない問題も多々あります。病人がいて病気を持っているから、なんでも病院に運べばどうにかなるというわけではないのです。救急か、緩和か、の二者択一という問いからして間違っています。その二つは常に並行しており、場面に応じてその比重を変えていく性質のものだと私は思います。

　今回のセミナーでは、緩和ケア医、救急医、そして救急の看護師の立場から様々な経験を披露しあいました。患者さんや家族にしてみればすべてが未経験で、不安をどうにかしたくて救急車を呼んでしまう。一方限られた人手と時間で急患に対応する救急部門との間で、期待と現実のズレは常にあります。コミュニケーションの行き違いを減らすためにも、地域で活躍する介護職、医療職の皆さんと情報共有を密にし、目の前の人を大切にする関係を築いていけたらいいなと思います。そうすることで、患者さんや家族の意向に沿った人生のお手伝いができるのだと思います。

　当院は救急に力を入れる病院であると同時に、神奈川県の地域がん診療連携拠点病院にも指定されています。がん患者さんに必要な時に必要な医療を提供するため、専門領域を超えた連携が現場を支えています。